

まきどき・植えどき・収穫どき  
**どきどき情報 1月**

【新年の挨拶】

新年明けましておめでとうございます。

新年を迎え皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

昨年12月31日にあさつゆは売上3億円を突破しました、最終日に達成という二度とやろうとしてもできないような事を皆様の方で成し遂げることが出来ました。年末10日間程の頑張りには特に素晴らしいものでした。目の前の目標に向かってみんなが力を合わせた時には、本当に考えられないような力が出るんだと、改めて感激した次第です。

新年を迎えあさつゆ職員の今年の心構えを事務所に貼りだしました。それは、

「真夏には冬の仕度を、厳寒に夏の準備を」 本多静六氏（林学博士）の言葉


“何事にも、早め早めに準備をし、仕事を済ませてゆく” という事を今年の日々の心構えとしたいと思います。

今年も皆さんと一致団結して新たな目標に向かって歩いてゆきましょう。本年が、皆様にとって幸多い年であることをご祈念いたします。

平成27年 元旦

あさつゆ運営組合長 伊藤良夫

～1月の野菜・花きの管理～

種まき	栽培のポイント																					
<b>野菜</b> ・トマト （半促成作型 3月下旬～4月上旬定植） ・レタス （トンネル作型 2月下旬～4月上旬定植） <b>花き</b> ・夏秋ギクの挿し芽	<b>○トマトの播種・育苗</b> 定植時期から逆算して、約70日前が播種期となります。発芽をそろえるために、電熱温床線や小トンネル等を利用して温度の確保に努めてください。なお、発芽後の灌水は午前中に行い、夜間が多湿にならないようにしましょう。昼間は日光に当て、徒長しないように管理することが重要です。 表1：果菜類の育苗期の温度管理目標（発芽後）																					
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>発芽時の適温</th> <th>昼間気温</th> <th>夜間気温</th> <th>播種時期の目安</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>トマト</td> <td>25～30℃</td> <td>25℃</td> <td>15～16℃</td> <td>定植前70日</td> </tr> <tr> <td>キュウリ</td> <td>25～30℃</td> <td>23～25℃</td> <td>25～30℃</td> <td>定植前40～45日</td> </tr> <tr> <td>ピーマン</td> <td>30℃</td> <td>25～28℃</td> <td>22～24℃</td> <td>定植前70～80日</td> </tr> </tbody> </table>		発芽時の適温	昼間気温	夜間気温	播種時期の目安	トマト	25～30℃	25℃	15～16℃	定植前70日	キュウリ	25～30℃	23～25℃	25～30℃	定植前40～45日	ピーマン	30℃	25～28℃	22～24℃	定植前70～80日	
	発芽時の適温	昼間気温	夜間気温	播種時期の目安																		
トマト	25～30℃	25℃	15～16℃	定植前70日																		
キュウリ	25～30℃	23～25℃	25～30℃	定植前40～45日																		
ピーマン	30℃	25～28℃	22～24℃	定植前70～80日																		

○土づくり～目的に合った有機物を選ぼう～

分解の速さや、含まれる肥料成分の種類や量には違いがあるので、目的に応じた有機物を選択することが大事です。一般に、**動物由来の有機物は肥料的効果（特に窒素）が高く、分解速度も速い傾向にあります。一方植物由来の有機物は、肥料的効果も分解も緩やかです（マメ科は除きます）。**例えば、おがくずは土中で分解するのに数十年かかり、最初の数年間は分解するために逆に窒素を必要とします。したがって、おがくずやバーク（樹皮）などの木質系の有機物は、土の中に隙間を作り、水はけを良くするのに向いています。

有機物の肥料的効果（とくに窒素）		
大きい（速い）		小さい（遅い）
動物質	植物質（草質）	植物質（木質）
家畜尿（スラリー） 鶏糞 豚糞 魚粕	なたね油粕 肉牛糞 乳牛糞 茸廃培地（コーンコブ） おから 稲わら 生ゴミ マメ科緑肥	イネ科緑肥 腐葉土 樹皮（バーク） 広葉樹おがくず 針葉樹おがくず
小さい	土の物理性（水はけ・通気性）改善効果	大きい

注意点は、**未熟なものを使わない**ことです。分解が不十分だと、病害虫や雑草種子が死滅せず、施用することで病害や雑草の発生を助長します。また、春先温度が上がって急激に分解し、作物の根を傷めてしまうこともあります（昨年は稲わら施用した水田でガスがわき、葉が白化する現象が多くみられました）。微生物資材を施用し、分解を促進することも有効です。

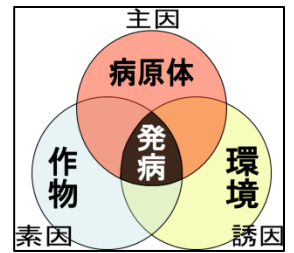
# ☆あさつゆ農薬・病害虫防除講座～第3回のおさらい～

## ○ 殺菌剤編

### ・なぜ作物が病気にかかるのか

病原体、作物側の要因（窒素過多、日照不足など）、病原菌にとっての快適な環境条件（温度、湿度、風通し）の3つの要素が揃った時に初めて発病する。

したがって、これらの要因のどれかをつぶせば発病しない。



### ・予防剤と治療剤

予防剤は作物の表面を農薬で覆い、病原菌の侵入を防ぐ。つまり、散布ムラがあったり、処理後に生長した茎葉には効果がない（ボルドー、ダコニール、ジマンダイセンなど）。

治療剤は植物体内まで浸透するので、侵入した病原菌を死滅させる。植物体内に速やかに侵入するため、散布ムラや雨などによる影響は少ない（アミスター、スコアなど）。あくまで**病気の進行を止めるだけで、病気に侵された作物が治るわけではない**ことに注意。

### ・病気の対処方法

- ① 予防が基本。症状が進展してからでは対応が困難。
- ② 畑に感染源がないよう綺麗にしたり、雑草の除草や排水対策などを行って病原菌が好まない条件を作る。

## ○ 展着剤編

### ・展着剤は薬液を付着しやすくし、農薬の散布効果をも高める

特にイネやネギは葉の表面にワックスがあり、付着しにくい。なお、入れすぎると逆効果になる。

### ・混用するときの順番はテニスを合言葉に（①テ：展着剤 → ②二：乳剤 → ③ス：水和剤）

薬液が均一に混ざることによって効果が安定する。

### ・場合によっては薬害を引き起こす展着剤もある

機能性展着剤（ニーズ、アプローチ BI など）は表面から内部へ薬液を浸透させる力があるので、容量を間違えると薬害を引き起こす。

## ○ 農薬散布時の注意

① 防除衣…農薬を浸透させないことに加え、夏の暑い時期に体調を崩さないよう涼しく着られることが重要。ゴアテックス、サイトスなどの資材がある。

② 保護メガネ…ゴーグル型で曇り止め加工をしてあるものを着用する。市販の曇り止め液を使うのも有効。

③ 農薬用マスク…ガーゼを20枚重ねても50%程度しか農薬の吸入を防げないが、**農薬用マスクであればほぼ100%防くことができます**（粉剤の場合）。使い捨ての農薬用マスクは、形が崩れたり極端に汚れたりしなければ再利用することができる。

④ 手袋…水を通しては意味がないので軍手は×。

⑤ 長靴…間違っても運動靴などを履いて散布しない。



写真：散布時の服装

行為の注意喚起マーク		
マスク	メガネ	手袋
防除衣	その他	保管
注意・警告マーク		

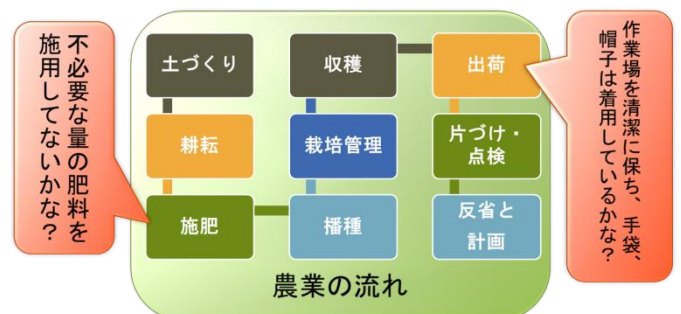
図：農薬のラベルには注意喚起マークが記載されている

## ○ GAP（よりよい農業の実践）とは

GAPとは**自身の農業を振り返り、問題点に対して自ら改善に取り組むこと**である。そのためには、問題点がどこにあるのか、農家自身が認識する必要がある。

### ・病害虫防除講座の目的

農薬に関する正しい知識をもち、病害虫を適正に防除するため。



## あさつゆ連絡

電話番号：0268-41-1062  
FAX：0268-41-1063

## 技術事項作成協力

上小農業改良普及センター（岡崎）  
電話番号：0268-25-7156（直通） FAX：0268-23-2161